イ　学級全体の，授業に対する「関心・態度」の評価

「検証授業Ⅱ」は，以上のような考えをもとに，「鉄の生産工程の理解」をその中心的なねらいにしながら，授業そのものに対する「関心・態度」が，知識・理解にどう影響し，さらにそのことが，「社会的事象に対する関心・態度」にどうかかわるかを見ようとしたものである。

表４　（P21）に示した評価計画によって授業を実施したが，ここでは，特に，№４の評価法とその内容について考察する。

これは，学習のまとめの段階で，１単位時間の学習をふりかえらせ，導入，展開，終末のそれぞれの段階における子どもたちの，授業そのものに対する「関心・態度」を，質問紙による自己評価法でとらえようとしたものである。

それを整理したのが，次の図11である。

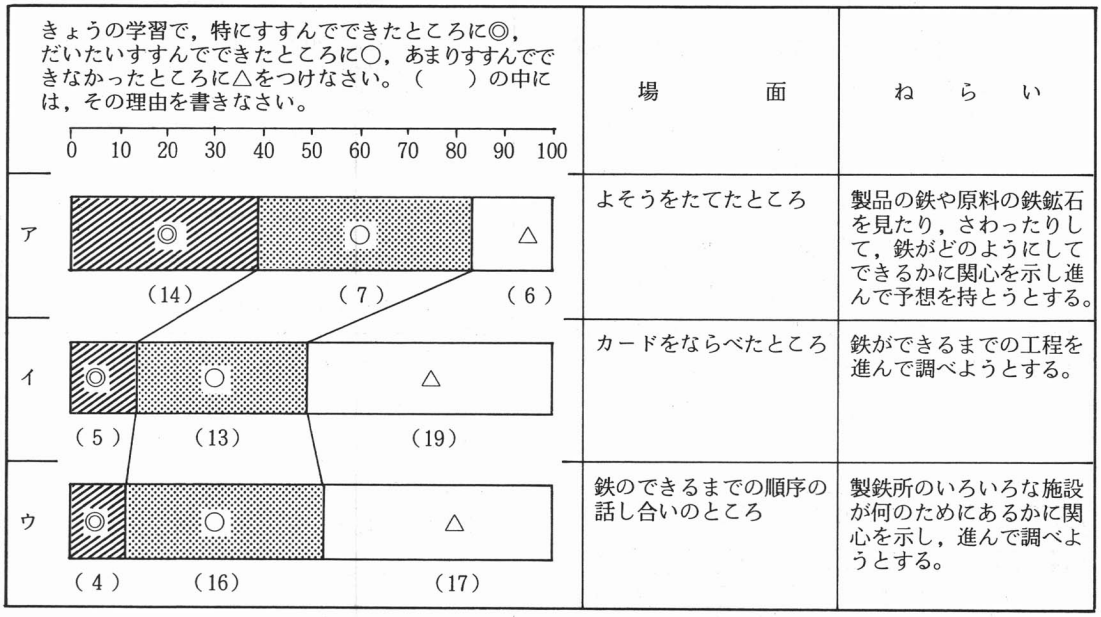

図11　授業に対する「関心・態度」の変化（学級）

授業の導入段階で，◎が38％，○が46％学級のおよそ84％が，「すすんでできた」としているにもかかわらず，学習が進んでいくにしたがって，「すすんでできなかった」とする子どもが増えていっていることがわかる。この「検証授業Ⅱ」における№4(P21)の評価結果は，授業終了後に分析したものであるが，この結果を待たず，指導者も，この授業を参観したほとんどの観察者も，子どもたちの多くが，授業の展開から終末段階にかけて，次第に，学習に対する興味，関心を後退させていったことに気づいていた。このことの要因について，次のようなことが考えられる。

- この授業の導入段階において，子どもたちに，十分な問題意識を持たせることができなかった。
- 予想を持たせるにあたって，子どもたちにそれにかかわる知識がなく，追究の見通しがたてられなかった。
- 鉄の生産工程の「教える」べきところを，子どもたちから引き出そうとした。

これは，学習指導に関する問題であり，「関心・態度」の評価の問題に直接かかわってはいない。しかし，今，この種の「関心・態度」を問題にしているのは，このような，いわば授業そのものに対する「関心・態度」の評価が，日